きもの文化の学習と環境配慮と循環型衣生活をつなげた授業の効果

○大矢幸江（東京学芸大学大学院生）
薩本弥生（横浜国立大学）

抄録：**目的**

家庭科の衣生活分野の学習では、「衣服と社会生活のかかわり」を理解させることが目標として挙げられている。これまで、衣文化への関心を持たせる学習において、きもの文化を取り上げ、ゆかたの着装を含む授業実践を行ってきた。そのことにより生徒のきもの文化への興味関心が喚起されることが明らかとなっている。本研究では、ゆかた着装後の授業で、どのような内容を取り上げると学習に効果的かを検討した。そこで、「もったいない精神」を共通とする、きもの文化の学習（きもの単元）の「きものの繰り回し」と環境共生の観点から資源循環型の衣生活の単元（環境単元）を接続する教育プログラムを考案し、授業実践を行った。異なる内容の２つの単元の授業を関連付けることにより、双方の興味関心や理解を深めることに効果があるかを検証し、明らかにすることを目的とする。

方法

平成 27 年 12 月～28 年 1 月に、公立中学校 3 年生 290 名を対象に、きもの文化の学習とゆかたの着装を含む授業実践を行った。続く環境単元の授業の最初に、きもの単元の振り返りとして、過去の日本人の衣生活のきものの繰り回しが、もったいない精神をベースに資源循環型の生活を構築していたことを学ばせた。続いて環境単元の生徒が主体の活動として「制服の一生すごろく」を用い、ゲーム感覚で楽しみながら制服の製造から廃棄までの流れの中での見えない部分の二酸化炭素の排出量や、環境負荷について学ばせる。現代の衣生活の問題点と自分にできることを考えさせた。これらの単元を接続する授業の効果を検証するために、きもの単元のゆかた着装授業の前後と、環境単元の授業後にアンケート調査を実施した。

結果

授業実践校の生徒について、次の特徴が明らかとなった。ゆかたを着た経験は 75%、着物を着た経験は 57%であった。しかし、ゆかたの着方は 58.5%が知っていると思っていない、自分で着つけできると思っていないは 72.8%であった。65.0%がゆかたを着てみたいと思っていたが、自分で着つけしたいでは 50.6%に減った。授業前後の意識を t 検定にて比較すると、着装意欲・着装理解・きもの文化への誇り・着物の TPO すべてにおいて平均値が上昇し、その変化は 0.1%水準で有意差があった。環境循環型衣生活との相関をみるために因子分析を行った。ゆかた授業前 3 因子、授業後 4 因子、環境共生 5 因子が得られ、重回帰分析からは授業後の、「ゆかた着物関心・意欲・高揚感_後」因子（ゆかた関心意欲因子）が環境意識との相関が

深かった。そこで、「ゆかた関心意欲因子」を高、中、低の 3 群に分け環境共生の 5 因子を従属変数として分散分析を行った。その結果、ゆかた関心意欲因子の得点が高いほど、「環境エネルギー認識と意欲」「エコ配慮の衣生活意識」が高まることが明らかとなった。しかし、「リユース行動」との相関は見られなかった。きもの文化への興味関心が深まった生徒は、環境共生への認識・意欲への高まりは見られるものの、実際のエコに対する行動には繋がっていない実態も示された。今後高められた意識を実生活に落としこむための授業の工夫が必要である。また、衣服の「作るエリア」「着るエリア」「捨てた後エリア」で自分にできることを自由記述で回答させた。こちらの分析も進めていく。